

1月28日にこの世を去った。84歳だった。

父の一生は、兵庫県生物学会（戦前は博物学会）の諸先生方からいただいたご厚情ぬきには全く語ることができない。この紙面を御借りして厚く御礼申し上げます。また、父が38年の長きにわたってお世話になった滝川学園の校主殿や各代の校長先生をはじめとする皆様にも厚く御礼を申します。

（さとう ひろやす：三重大学工学部教授）

## 森為三先生を偲んで

三木 正士

私は1930年に生れ、今夏65歳となります。新制兵庫県立農科大学1期の受験に、生れて初めて篠山を訪ね、旧連隊跡の学舎（兵舎跡）での面接で森為三先生とお会いした。いま、当時の先生と同じ年齢となり、年月の経つ早さを感じます。

戦時中の工場動員、敗戦後旧制中学卒業後、学制改革で、新制高校3年編入、翌1949年卒業。旧友4人と受験し、兵舎跡一階の寮に転がり込みました。1人はその後北大に合格し、1人は下宿し、2人残りました。私の他は神戸以外の出身でした。旧制高校中退、満州医専中退など多彩な顔ぶれの同期生と、丹波篠山町で生活し、私は卒業後も2年半、計6年半の青春時代を過ごしました。

戦時中に設立された神戸医専の予科が、敗戦翌年、旧連隊跡に移り、私が入学した時は、予科（白線・マント服）の2・3年と実験室・図書室・食堂などは共用でし

た。講義室だけは兵舎の二階を、寮は一階を改造したものでした。講義・実験は教養の2年間は殆んど予科の先生方が兼務されていたようです。

私達は、森先生を予科長と呼び、動物学の講義を受けました。今年1月の阪神・淡路地震で自宅二階の書棚の相当数の書類が落下し、後日、片付けた時、動物学の赤茶けたノートを見つけました。森先生の講義は黒板全面に用語を書かれたのですが、ただu・n・m・w・vなどの筆記体は判読に苦労して記録した思い出があります。

当時、学制改革を機に岸田県知事のもとで医大予科の職員の処遇と地元の要望などで、農科大学が設立されたのだと思います。学長は北海道大学から三宅捷先生を招聘し、学長官舎（武家屋敷改造）、送迎自動車（運転手付）を準備され5月に着任されました。挨拶の中で「諸君を紳士として扱う」と言われたのが耳に残っています。森先生は予科生を2年間指導された後、1951年より農大副学長となられ、私は三回生で発生学の講義・実験を受講することになりました。系統的な発生学のドラマを面白く聴いたことが、思い出されます。イモリやカエルの実習材料は豊富で、広島大学から来られた宮田助手の切片標本が多数ありました。しかし、臨海実習が単位取得の条件とかで、夏休み、香住の水産高校を借りて、寮で食事・宿泊、実験室でウニの発生・プランクトン観察などをやりました。二回生も共に参加で、夜遅くまで騒ぎ、あの温厚な森先生に厳しく叱責されたのも古い思い出です。

練習船でプランクトンネット引きや、洞門めぐり、近



兵庫農科大学校舎。  
開学当時一階は寮、  
二階は講義室。3年  
後に一階は研究室に  
改造された。

（元篠山連隊兵舎、  
現鋳物工場の倉庫）

くの応挙寺見学、居組港までのハイク、夜は友人と香住公園まで歩いて行ったものです。

学部では、昆虫学の岩田久二雄先生の部屋でお世話になり、東京から来られた奥谷助教授の県営住宅に押しかけ、ご迷惑をかけました。岩田先生は昨年他界され、残念でした。入学後、3年経って農科大学らしくなり、先生方は、京大・北大・台北帝大などの出身者が多く外国の話や、講義の合い間によく聞きました。日曜には、見学・採集会が企画され、何度か参加しました。裏の盃山・多紀アルプス連山・瑠璃溪など、いつも森・岩田・浜田・樋口(篠山農高)の諸先生は、ご一緒のことが多かったようでした。70歳に近い高齢の森先生の元気に、学生の私達も励まされました。サンショウウオの説明には造詣の深さにふれ、学問の面白さを肌で感じたものです。

私は1953年卒業しましたが、公務員試験に合格するくらいしか就職は困難な時代でした。幸い農大教養の生物第二(植物)の助手に籍を置かせて頂き、浜田秀男教授の指導を受け、2年半研究室で過ごしました。教養の時代は中庭のバラック?建ての研究室でしたが、旧兵舎を改造して教養生物も新しい部屋に移っていました。南側に教授室と教授研究室、中廊下の北側に実験室の配置でした。生物第一(動物)・第二(植物)は隣りで、植物教室には堀江助教授、辻英夫助手と私、動物教室に、野草俊作助教授、宮田澄男助手、河合雅雄助手が居られ、よく雑談に行ったものです。河合さんがニホンザルを連れて来て、幸島の話面白く聞かしてもらったものです。

夏になると、また、香住の臨海実習、今度は仕事でついて行きました。早朝魚市場へ森先生のお供をし、珍しい魚があると標本ビンにホルマリン漬けにして持ち帰りました。森先生の嬉しそうな童顔が今も眼に浮かびます。

当時県財政も逼迫し、給与の遅配、昇給延伸などもあり大変でした。国立移管、教養廃止問題も噂にのぼり、私は1955年秋、大阪の高校教諭に転進し、以後37年間大阪北摂で生活し、5年前退職を機会に生れ故郷垂水に戻って現在に至ります。森先生も播州生れ。垂水も神戸市ですが、播磨の東端です。余生を兵庫の自然に親しみたいと願っております。(みき まさひと)

## 神戸生物クラブの誕生

春名 利雄

昭和31年頃、「神戸生物クラブ」が誕生した。それより前、昭和12年頃には神戸の大丸百貨店に「神戸生物同好会」というのがあった。私はその頃御影師範学校の5年生で、この会の会員であった。時々この会の催しに参加したが、市立西宮高等学校の山鳥吉五郎先生などがお

話しして下さったように覚えている。

「神戸生物同好会」は、神戸の大丸百貨店が会員を集めてやっていた会であった。昭和31年頃になって、近畿の各地で夏期水練学校中に事故があった。大丸百貨店では商売上にこのような事故があってはならないと考え、「生物同好会」を学校の先生方の行事にしたいと考え、兵庫県生物学会の神戸支部の先生方に申し出てきた。昭和31年頃のことをもう少し詳しく言うと、学校の団体行事として行った伊勢での水練学校に事故死が発生した。引き続き、関西の学校でも事故死が出るなどしたため、兵庫県生物学会に対して「生物同好会」の将来を引き受けてほしいと依頼があった。その当時、神戸市立二宮小学校の校長、古川博二先生は、理科研修部の部長であったため、大丸百貨店からの申し出を受けて、「神戸生物クラブ」が発足した。それに伴って事務などが私のところへ来て、会の名前を決めたり、使用するマークを従来のテントウムシから今のアゲハチョウにした。これは私の創案である。

理科研修部の先生方の中には、児童を20~50人も引率して、この会に参加する方もおり、一時は一回の採集会に3,000人の児童らが出席したこともある。道路脇、お寺の庭、水道トイレなどが著しく使用されて、苦情があったこともあった。反面、児童の観察や標本は充実して、立派な作品が生まれるようになった。

「神戸生物クラブ」の会員は、徐々に小学生、中学生にしぼられてきた。事故防止の策として父兄同伴が言われるようになり、これが会則になってきた。会員の児童生徒とその父母・父兄といっても大半が母親で、これらが一団となって歩くと、子供はそのかたまりから遠のいて動くようになりがちで、採集用具を持った母親たちが熱心に活動しているかのように見えだしてきた。それに子供の成長に伴って兄姉が辞めて弟妹が引き続いて会員となるため母親は繰り返して出席していくうちに実力をつけてくるようになり、講師をとりまく会員の多くが母親たちのかたまりとなってきた。

(はるな としお:常任理事)

## 紅谷先生のこと

春名 利雄

ツメタガイを持った女の子に出会った。平成7年6月25日、「神戸生物クラブ」的形観察会でのことであった。この子は私の側に来て手のひらを開いた。これ、ツメタガイ。大きさは5ミリにもみたない小さな貝だ。私は手にとってこの貝を眺めた。なるほどツメタガイである。丁寧に貝を返すとよく見つけたねと言った。小学1年生だ。弟が2歳、妹が1歳。弟はここへ着いた時、体程も